The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	秘密とその未来 : ウィニコット・ラプランシュ・ドルトとコミュニケーションのねじれ
Author(s)	村上, 靖彦
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2011, 37, p. 117-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

秘密とその未来

―ウィニコット・ラプランシュ・ドルトとコミュニケーションのねじれ―

村上　靖彦

目　次

1. ラプランシュにおける謎のメッセージとドルトにおける死の欲動
　ラプランシュの一般誘惑理論
　ドルトにおける死の欲動
2. ウィニコットの倒錯事例から見た謎の伝達
　意図せざるコミュニケーション
　身ぶりの伝承と視線触発
　死の欲動から考える～象徴構造をマヒさせるコミュニケーション
　基礎的視線触発の水準でのねじれ
　情動の主体としての象徴構造
　象徴構造の三段階の作動と経験
　謎のメッセージの一般化

秘密とその未来
－ウィニコット・ラプランシュ・ドルトとコミュニケーションのねじれ－

村上　靖彦

コミュニケーションには伝えたいことを伝えるだけでなく、偽装したり隠したりという場合もある[村上 2009a]。このような嘘や秘密の場合に、単に内容がねじ曲がって伝えられるだけでなく、このはっきりとは伝えなかったという事実ゆえに、相手の未来に何らかの悪影響をもたらすことがある。例えばドルトは繰り返し、子どもに対して隠された秘密（たとえば養子であること、自分が誕生する前の兄弟の死、その子供の誕生を親が望んでいなかったということ、など）が、のちの精神疾患を構造的に準備するということを主張する[Dolto 1985, 171, 190 他]。この点を議論するために本論ではウィニコットの性倒錯の事例を分析する。ラプランシュの謎のメッセージという概念、及びドルトがフロイトの死の欲動を読み替えた議論を参照した上でウィニコットの事例の分析に活かしたい。

1．ラプランシュにおける謎のメッセージとドルトにおける死の欲動

ラプランシュの一般誘惑理論

ジャン・ラプランシュ(1924-)はポンタリスとの共著による精神分析学事典によって知られているフランスの精神分析家である。現在も進行中のフロイト仏訳全集の監修者であり長くパリ第７大学で教鞭を執った。もともと哲学科の学生だったがラカンの分析治療を受けた後に医学部に入り直し、精神分析家になっている。その後 1961 年にラカンから離反し、これから説明する一般誘惑理論を提唱することになる。

一般誘惑理論は、エディプス・コンプレックスに代替する精神分析の基礎理論を提出することを意図している[Laplanche 1987]。フロイトは、大人による幼児の誘惑の外傷が思春期以降にヒステリーを引き起こすという『ヒステリー研究』(1895)の仮説を 1897 年に捨て、「子どもは実際に誘惑されるのではなく、誘惑されるという幻想をもつ」という原幻想仮説へと移行したと一般に言われる。こうして幼児期の性的な幻想に基点を置く神経症理論が『夢判断』(1900)において精神分析として創始される。他方、エディプス・コンプレックスは比較的後期に練り上げられた理論であるが、フランスで大きな影響力を持ったラカンが、このエディプス・コンプレックスを重視したのだった。

ラプランシュはエディプス・コンプレックスを軽視して初期フロイトの誘惑外傷を再興しようとする。エディプス・コンプレックスは西欧の一夫一婦制の核家族をモデルとしているために必ずしもあらゆる文化に普遍的ではない。それゆえ、より普遍的に妥当する成熟した「大人による性的に未熟な乳児の養育」という状況を精神分析の出発点にしようとするのである[Laplanche 2007 ; 209]。フロイト自身は、神経症患者の抑圧された記憶のなかに外傷記憶を見つけられないことがあることから原幻想仮説へ移行したと言われるが、ラプランシュはフロイトのテキストの詳細な検討によって、必ずしも誘惑理論は捨てられていないと論証する。むしろ外傷が倒錯という特殊な出来事ではなくあまりに一般的な状況であり（それゆえに一般誘惑理論である）、誰もが経験するものであると考えることで、フロイトがエディプス・コンプレックスに望んだ普遍性よりさらに普遍的な出発点を手に入れられるとしている。

ラプランシュの議論を要約してみよう。親からケアを受ける乳児は、親の（無意識的な性的）欲望も受け取る（たとえば授乳する乳房・乳首の興奮を通して[Laplanche 1987 ;125, 127]）。この欲望は親自身も気づいていないものであるが、性的に未熟な乳児にとっては全く了解不可能なものである。ラプランシュは親から受け取った理解不可能なメッセージを「謎のメッセージ」と呼ぶ[*ibid.*; 125]。彼の理論はフロイトのように小児性欲を起点とするのではなく、親の性欲を理解不可能な謎としてうけとるという事実を起点とする。乳児は、この謎のメッセージに自分が理解可能な意味を与えて翻訳する[*ibid.* ; 130]。こうして事後的に作られた翻訳が隠蔽記憶となる。翻訳の際このメッセージがその真の意味としてもっていた誘惑は謎にとどまり認知されないため、意味を欠いた感覚刺激が沈殿する[*ibid.* ;131]。この理解不可能な感覚刺激の沈殿が原抑圧であるとラプランシュは考える。無意識とは、このように謎が沈殿すること、意味記憶ではなく記憶され得ないものが沈殿する現象であることになる。これが謎のメッセージである。謎のメッセージとなった誘惑は事後的に何かイベントがあったときに解釈され直す。性的外傷を思春期に受けた場合などはこの幼少期の謎が外傷的な記憶として（無意識の中で）解釈されることがありうるというのである。しかしながら、事後的な解釈が、当初の謎をすべて明らかにすることは出来ない。意味づけ不可能な謎はつねにのこり続け、それゆえに謎の再解釈の運動が無際限に続くことになる。本論にとっての要点は、コミュニケーションに付随してはからずも伝達された現象が、だいぶあとになって効果を持つという発見である。

『ヒステリー研究』(1895)の時期のフロイトは、性的に未熟な段階で大人による性的な誘惑という出来事 A にさらされると、そのときには傷を受けなくても、後に性的に成熟した段階で何か別の出来事 B が起こった際に、過去の誘惑 A が始めて性的意味を獲得して、ただし潜在的に活性化し、その影響で B が外傷体験という意味を持つことになると考えている（A は抑圧されているので、治療されない限り意識に上ることはない）。真に外傷的なのははじめの A「幼少期の性的誘惑」であるはずなのだが、患者にとっては

B の方が外傷として意識に上る（子どもの頃のおじによる性的誘惑が潜在的なトラウマとなり、後におじといとこの性交を見かたことをきっかけとして神経症症状を発症する『ヒステリー研究』第 4 症例のカテリーナなどが典型例であろう）。心的外傷は二段階の出来事をもち事後的に成立するというのである。この二段階の心的外傷の仕組みを一般化して、ラプランシュは一般誘惑理論を唱えている。ラプランシュは、フロイトを分析してトラウマは必ず二回のトラウマとして生じると議論する[Laplanche 1970 ; 70-71]。自覚されることのなかった一回目のトラウマが潜在的な脆弱性となるのである。外傷的出来事に対する脆弱性には個人差があるといわれるが、この幼児期の潜在的な傷が、後年の脆弱性を作り出すと彼は考える。ラプランシュの考えでは自然災害に由来する外傷も、幼少期の外傷に対する二番目の外傷であるがゆえに破壊的に作用するというのである[Laplanche 2006, 89]。

一般外傷仮説はゆがんだコミュニケーションの構造的影響を考察する点で興味深い議論であり示唆に富む。しかしながらいくつかの疑問がある。１）この議論が成立するためには、あらゆる人が幼少時に謎を背負うのではなく、ある特定の体験が幼少時にすり込まれた場合に脆弱性を生む、と考えないと整合性がとれない。ラプランシュの議論では神経症の状態と健康な状態をいかに区別するか、神経症と精神病のあいだの発生構造の違いをどう記述するかといった点で難があるように見える（彼自身は両者を区別する議論を提示していないように見える）。ラプランシュ自身、この構造自体は病的なものではなく、抑圧された記憶の翻訳が根本的に失敗した時に重篤な精神障害が生じると考えている[Laplanche 2007 ; 201-202]。しかし彼は十分にはこの点を説明していない。２）そもそも子供による大人の養育を、仮に無意識的な性欲動が入っているとしても、そのまま愛情として自然なものとして受け取るように思われる。親の無意識的な性的欲望が子供にとっての謎になるためには、子どもにとっても無意識的性的欲望という審級が潜在的に成立している必要がある。ラプランシュはこのフロイトの前提を疑うところから始めたのではなかったか。謎とは少なくとも潜在的には存在するものが隠されたという事態である。昆虫にとって人間の言語は謎にはならないのと同じように、単なる大人による養育では謎は生じないのではないか。３）そして大人と子供の発達上の差異が謎を生むのならば、別に性的な以外の要素も謎となりうる。たとえば言語がそうであろう。大人は言語で子供に話しかける。子どもは、潜在的には言語構造へと開かれているがその意味内容を理解できるようになるためには時間がかかるから、乳幼児期には場合によっては外傷になるような謎として現象していることになろう。実際ドルトの事例に出産直後に聞いたと思われる周囲の音声が一三歳の時にフラッシュバックするというものがある[Dolto 1987, 167]。

ドルトにおける死の欲動

ラプランシュの問題点を補完するために、同じくフランスの精神分析家であるフラン

ソワーズ・ドルト(1908-1988)が展開した、彼女独自の死の欲動理論を参照したい。死の欲動は、個体が無機物へと回帰しようとする傾向性を指す概念として『快楽原則の彼岸』(1920)以降のフロイトによって仮定された現象である。『文化への不満』や『自我とエス』で見られるように、彼の場合は破壊衝動と結びつけられることが多かった。ドルトはこれをアレンジしている。その要点は、１）生の欲動はコミュニケーションの力・関係を結ぼうとする欲動である。死の欲動は関係を切断する力動であり、欲望の不在である[Dolto 2003, 34]。死の欲動においては、あらゆる能動性が不在である。２）フロイトの想定とは異なり、死の欲動は攻撃性（破壊衝動）ではない。攻撃性は生の欲動の一種であり、死の欲動と対立する。死の欲動はむしろ攻撃性の不在である。ただし相手から攻撃性を向けられたときに、自分のなかで死の欲動が作動することがある。３）死の欲動は表象をもたない[Dolto 2003, 51]。それ自身は不安や恐怖とも結びつかない。４）死の欲動は、主体が各発達段階で獲得したはずの象徴構造（各発達段階のコミュニケーション様式でもある）の停止でもある。５）時期によって、睡眠を死の欲動と同一視するときと[Dolto 1985, 154]、区別するときがある[Dolto 2003, 50]。本稿では睡眠から区別する立場を採用する。たとえば強迫神経症の母親に巻き込まれている息子が統合失調症を発症しているときに、この息子において何らかの象徴構造の作動がうまくいかないことが示される[Dolto 2003, 83-85, 142-150]。

１）と４）ゆえに、死の欲動が作動するとき、主体が一旦は獲得したコミュニケーションや身ぶりの型が働かなくなることがある。彼女が身体イメージと呼ぶ空想身体[i]にインストールされた象徴構造が働かなくなるのである。言いかえるとコミュニケーションの歪みが、構造上のちの成長に対して悪影響を持つ。

乳児と養育者との関係を考えたときには、養育者がある欲望をもって乳児をケアするというのははじめからそうであって乳児にとっては「すでにそこにある」環境の全体である。そこに性的誘惑という意味を「謎」として読み込むのは、ラプランシュにおいても思春期になって「事後的に après coup/nachträglich」なのである。仮に彼が考えるような性的な誘惑があるとしても、病的な問題が生じるのは、発達段階に合わないような形で環境にゆがみがある場合、あるいはあるはずの環境に穴が空く場合、むしろたとえば養育者が子どもを欲望しなくなる場合であろう[ii]。親の欲望が子どもの機能の回路の一部をなしているために、もし親の欲望が欠けると子どもの回路が作動しなくなる。つまり子どもは自分が持っているはずの象徴構造を使えなくなる。このような回路の停止を実体化して、ドルトは死の欲動と呼んだのである。大事なことは、この象徴構造の作動の停止がある種のコミュニケーションの結果として起きるということである。親から伝達された「何か」によって、子供において「何か」が停止する。そのようなタイプのコミュニケーションをここでは捕まえたい。コミュニケーションのゆがみには負の伝達とでも呼べるような形態があるのであり、これがテーマである。

2. ウィニコットの倒錯事例から見た謎の伝達

さて本稿ではウィニコットが記載したある中年男性の事例を検討する[Winnicott 1971 ; 72-75]。この事例については以前引用したことがあるのだが[村上 2010a]、ラプランシュとドルトの議論を参考にすることで新しい側面が見えてきた。以前は創造性の障害というテーマから論じたのであるが、今回はねじれたコミュニケーションが引き起こす悪影響を論じる。

この男性は、四半世紀にわたって複数の精神分析家のもとで分析を続けてきたのだが、何かがうまくいかず分析が失敗に終わってきた人である。表面的には快調に分析が進行しているのだが、結局根本的な何かが変わっていないという幻滅を味わってきている。ウィニコットとの分析でもそのような状態が続いてきているのだが、ある金曜日にウィニコットは、本当は女性がもつはずの「ペニス羨望」について患者が語っていることに気がついた。このことをきっかけに治療は大きく動くことになる。ウィニコットはこの人が同性愛者ではないことを強調しつつ次のように記す。

> 「私はいま女の子の話を聴いています。私にはあなたが男だということはよくわかっています。でも私は女の子の話を聞いていて、女の子に向かって話しかけています。その女の子に向かって『あなたはペニス羨望について語っていますね』と語るのです。」[Winnicott 1971; 73]

この語りが決定的な効果をもたらし、停滞していた分析が動き始めることになったのである。患者が、「そんなことを〔私が女の子だなどと〕言ったら私が狂っていると思われてしまいます」[*ibid.*]と語ったのに対し、ウィニコットはこう書いている。

> 次の私のコメントが私自身を驚かせた。そしてこれが決着をつけた。私はこう語った。「あなたが誰かにそう語っているのではありません。私が、長いすの上に実際には男の人がいるのに、女の子を見て女の子が語るのを聴いているのです。狂っているのは、私の方です。」[Winnicott 1971; 73-74]

患者を育てた環境（母親）が、健康な男の子である患者を女の子として育てていたのではないかということが明らかになり、それを遊びの対人構造のなかで、セラピストが活性化することでクライアントの気づきも生み出したしくみについては、以前論じた[村上 2010a]。この発見によって患者は身体的にも楽になり、心理的にも満足して帰宅している（実際、治癒に向かってゆく）。

ところがこのセッションには後日談がある。月曜日に次のセッションを行ったときに、患者は風邪を引いていて気分も悪かった。明らかに感染症なのだが、患者は「本当は、

解決して気分が良くなるはずなのに、気分が悪いのはなぜなのか解釈してくれ」と要求している。画期的な進展が見られた金曜日のセッションから帰って、患者は妻と満足のいくセックスをし、本来であれば風邪はともあれ気分としては悪くないはずだというのである[*ibid.* ; 74]。

ウィニコットはこの気分の悪化を、患者のなかに植え付けられた女の子が抵抗しているのだと解釈する。患者のなかの女の子は女の子だと認めて欲しく、患者の身体を解放したくない、身体に対する自分の権利を認めて欲しいのだと解釈する。そして風邪は、「女の子」の自己主張としての前性器期的な妊娠を表しているというふうに読み取る[*ibid.* ; 75]。女の子が想像妊娠することで自己主張しているのである。

意図せざるコミュニケーション

さてここからウィニコットの事例をラプランシュとドルトの議論を参考にしつつ分析したい。まずはラプランシュが謎のメッセージと呼ぶ事態が、この事例で実現していることを確認したい。患者の母親は、患者に対して暗黙のうちにしかももしかすると自覚しないままに「あなたは女の子よ」というメッセージを発していた。男の子であった患者はこのメッセージを了解できない。ラプランシュは、一般に母親からの誘惑がすべて子どもにとって謎となると考えたが、実際に病的な謎として沈殿するのはその誘惑が倒錯的である場合ではないだろうか。この点むしろ初期フロイトの、大人が倒錯的に欲望を向けるときに子供は外傷を負うという理論は依然として説得力がある。

ともあれ、ウィニコットの事例では確かに性に関係する何かが母親から伝達されているのだが、子供だった患者にはこれが何なのかはわからないし、伝達されたということ自体が本人にももしかしたら母親にも自覚されていないような謎のメッセージが伝達されている。ただしラプランシュが考えたような性的誘惑ではなく、性別の混乱である。「女の子」として患者を扱った母親の接し方（身ぶりの型）のなかに隠されていた「女の子」とみなす視線は、理解不可能な違和感として感じられ沈殿したがゆえに、後年「病」として発現したと言える。

身ぶりの伝承と視線触発

このコミュニケーションで問題になるのはメッセージの内容ではなくて伝え方である。女の子に接するという身ぶりの型が母親の養育に浸透している。

身ぶりの型とは、空想身体に埋め込まれた文化的秩序である。空想身体が具体的なそれぞれの行為として発現する際にそれを導く。この型は少なくとも規範、創造性、コミュニケーションという三つの側面を持つ。１）たとえばタブーという構造が、禁忌の食べ物に食指が動かないようにする。この場合はあらかじめ行為に枠をはめ場合によっては抑圧的に働く規範としての秩序である。エディプス・コンプレクスで成立するジェンダーも、成立の仕組みはさらに複雑だがそのひとつである。２）あるいは仕事の経験が

蓄積するに従って改善される身の動かし方、新たな状況へと対応する柔軟さというようなタイプの秩序もある。この場合、「あらかじめ」枠をはめるのではなく、その都度新たに行為の型を作り出す。このとき型は抑圧ではなく創造性の媒体となる。もちろん規範も創造性の基盤として働くこともある。そして芸術活動の場合は作品のスタイルとして発現する。３）あるいはジェンダーや社会的身分に応じた話し方のように、身ぶりの型はコミュニケーションの型でもある。このような身振りの型は、たとえば養育のなかでも親から子どもへと伝えられてゆく。

空想身体への秩序の伝達を可能にする基盤は、ごっこ遊びや言語的コミュニケーションに見られる間主観的な知覚的空想である[村上 2009b、村上 2010a]。間主観的な知覚的空想においては、伝達の意志とは無関係に即座に否応なく空想内容が伝達される。この自動的で不可避的な伝達を超越論的テレパシーと呼ぶことにする。たとえばごっこ遊びにおいては石ころでできた「おにぎり」のような空想内容を共有してしまうが、それだけでなく「お母さん」役の型もそこで生成し伝達される。模倣は遊びにおいて板につく。空想身体同士が出会うために、空想身体に書き込まれる身振りの型も生成し、伝承される。男の子らしさ、女の子らしさといったジェンダーにまつわる身振りの型、あるいは大人の行動様式が模倣され、演じられることで身につけられて伝承されてゆくのである。ウィニコットの事例で母親が男の子を女の子と見たてるのは、子どもには秘密にされたごっこ遊びであり、母子間の空想身体の接続が生じているがゆえに、この女の子の型が非自覚的に伝達されてしまっていると以前の論文では考えた[村上 2010a]。

この空想身体を介した伝達には二つの側面がある。

一つめの側面として、相手の身振りの型が私に伝達される[Bollas 1987, 34]。ごっこ遊びや言語的コミュニケーションのような超越論的テレパシーのなかでは、空想身体同士が接続する。このとき片方の身ぶりの型が鋳型として相手の身ぶりに影響する。まさに視線、声、ボディコンタクトは私を触発するがゆえに、相手の身振りの型もまた私の空想身体を触発するのである。

相手の型がそのまま伝達されるだけでなく、相手の型を鋳型として異なる型が成立することもある。例えば異性愛的なジェンダーの成立において、息子が父に同一化し、娘が母に同一化すると共に、男親が娘の女らしさの形成に影響し、女親が息子の男らしさの形成に影響する。同性愛の場合はまたこの仕組が別様に働く。ジェンダーの成り立ちは、欲望と同一化を媒介とした型の伝承の複雑なヴァリエーションである。

私に向けられた視線と声ゆえに、私において相手の空想身体は組織化する。気づこうが気づかまいが、受け入れようが反発しようが、この影響から逃れることはできない。私が相手に感情的に応答するのは相手の空想身体が私において組織化するからである。後で明らかになるように、相手の身ぶりの型と私のもっている型との間の出会いが情動を生む。接続が生じている場合は、空想身体が持つ柔軟さゆえに、不可避的に相手の影響を受ける。つまり伝達と浸透が起こる。おそらくあらゆるコミュニケーションは暗黙

のうちに身ぶりの型を生成し、伝達している。なのでその事自体は病的ではない。むしろ健康な学習と発達にも必要なメカニズムである。

問題は他者という鏡を媒介として形成された新たな型が、他の人の型が環境全体と齟齬を来す場合である。この事例の場合は女の子の構造と男の子の構造が相容れない。

二つめの側面として、他者の視線は自分が持つ身振りの型を反射し自覚を可能にする。「見つめられる」ことで、つまり相手からの応答によって、私が自分がどのようなスタイルで世界と関わっているのかを暗黙のうちに感じる。ウィニコットはこれを照らし返し reflecting　back と呼んだ[Winnicott1 1971, ch. 9]。まきこみは相互に起きるがゆえに、私の空想身体は相手の空想身体の組織化に影響を与える。それゆえ相手において自分の身ぶりを見る。

この事例の場合は、自分では男のつもりなのに、鏡を覗き込むと女の子が映っているようなものである。このような形で女性的な身ぶりの型が鋳型にはめるようにして患者に植え付けられる。このとき周囲の人の勘違いが本人にも影響を与えうるのである。ウィニコットは、母親という鏡に自分が映らない場合、あるいは歪んで映る場合の事後的な影響としての抑うつと自己感の喪失について論じている[*ibid.*]。母親という主要な相手の反応の中に歪みがあるとき、私の行為や表現の型として照らし返されるものに歪みが生じる。比喩を使うなら、鏡がゆがんでいるせいで、自分自身もだんだん変形してゆくのである。

以上のような仕方で知覚的空想のなかで空想身体同士を接続するのは視線触発であり、この触発のおかげで相手の空想身体のもつ型が私の空想身体に対してインパクトを持つ。相手を鋳型として別の型が作られたり、自分の型が反射したりという伝承は、視線触発による接続がなければ不可能である。私の空想身体がもつ身ぶりの型は、視線触発によって相手の空想身体と接続するのである。視線触発は象徴構造の運搬者であり、それゆえに言語ではない視線がすでに「だます」というようなこともあり得るのである。逆に、視線触発を媒介としない模倣によって学習する自閉症の人の場合、型の書き込まれ方が定型発達の場合とは異なる可能性がある。彼らは社会生活のために必要な仮面として身振りの型を身につけ、この仮面とその背後の自己とのあいだにずれが残ることがあるが、これは彼らの学習の様式と関係しているのかもしれない。

謎のメッセージという現象が成立するための条件として、身振りの型が視線触発を媒介として埋め込まれるという基礎構造がある。さしあたり明示的な伝達内容と矛盾する型が暗に伝承されたときに謎のメッセージとなりうると言える。この「秘密」が他の象徴構造との齟齬を含むときに病的な効果を持つ。

死の欲動から考える～象徴構造をマヒさせるコミュニケーション

次にドルトの死の欲動という観点から見る。死の欲動は患者が長い間感じ続けてきた何かがうまくいっていないという違和感と関わっている。男の子としての身ぶりの型を

母親は認めず、そのかわりに女の子の型として反射した。そのため患者のなかにいくばくか女性的な型が浸透している。正確には女の子として周囲から扱われているような身ぶりの型を身につけている。結果としてウィニコットは患者と会話をする際に女の子と話していると感じている。この歪みに由来する違和が生活のなかで感じられ続ける。この仕組みはしかし、男の子としての型の代わりに女の子としての構造が植え付けられた、というような単純なものではない。

男の子としての身体像（空想身体を埋めこまれた身振りの型）の停止という形で、死の欲動が働いているとドルトなら言うであろう。母親が死の欲動を患者に与えたのである。しかもこれは母親の攻撃性とは全く無縁のものであり、むしろ愛情の帰結である。ここで強調したいのは、主体がもつはずの型の作動をマヒさせるような負のコミュニケーションがありうるということである。死の欲動とはこのコミュニケーションによって生じるマヒを実体化した名称である。その限りでは何の内容を伝達するのでもないような負のコミュニケーションである。しかも相手にネガティブな言葉を投げかけなくてもマヒさせるのである。

女の子の型が母から伝達されたが、周囲の人が要請する男としての型と齟齬をきたすとき、この構造上の齟齬が、それぞれの身振りの型の作動を妨害している。あるいは違和感をもたらす。つまり単なる男と女の言語表現や身ぶりの型の間のずれではなく、男としての象徴構造が何らかの形で部分的に停止するとともに、しかも本人は男として生活しているので埋め込まれた女の型を打ち消している。つまり男性としての型と女性としての型の双方がマヒしている。

これは「葛藤」ということばで日常語られているものの特殊な一種である。典型的な葛藤はたとえば会社の論理と社会道徳の食い違いの板挟みになるというような場合であろう。このとき少なくともどちらかの構造はうまく作動しないし、いずれにしても違和感を残す。この場合葛藤を感じるのは意識であるとしても、葛藤を引き起こすのは意識ではなく互いに矛盾する行為の指針である。特定の状況による触発のもとで、身体という場で出会った二つの象徴構造が齟齬を持つものとなるのである。本事例でも、ジェンダーという社会文化制度が、身体において葛藤を表現している。本事例の特殊性は、葛藤する二つの構造のうちの一方を意識することができないという点、身体に書き込まれているために遠い未来にまで影響するという点である。

本事例の場合、周囲の環境が要求する身振りの型のあいだの矛盾であり、これが身体に書き込まれる。後年になってこの身体に書き込まれた葛藤が環境において作動する。それゆえにウィニコットが気づく。言い換えると環境の側でからみあう諸象徴構造と、身体に浸透している身振りの型としての諸象徴構造は連続している。象徴構造は世界を貫くときに「状況」として現象し、身体を貫くときに身振りの型として発現する。象徴構造間の齟齬は、世界の側と身体の側でそれぞれ別様に表面化する。

基礎的視線触発の水準でのねじれ

すでに見てきたとおり、身振りの型は超越論的テレパシー（ごっこ遊びや言語的コミュニケーション）のうえで生成し伝承される。この事例の場合も母親の「女の子」ごっこが問題であったといえる。とはいえこの事例の場合は事情がさらに深刻である。というのはゆがみがさらに深い水準で生じているからである。

ごっこ遊びの超越論的テレパシーは養育の安定をその基板として要請する。この安定を、ウィニコットは抱っこ holding と呼び、それが内面化されることで自己が形成されるという過程を理論化してきた[Winnicott 1971]。これは養育者からの視線触発のシャワーを浴び続けることで成立するがゆえに、論者はこれを反復され内面化された基礎的視線触発と呼んできた[村上 2010a]。この基礎的視線触発も一つの身体に書き込まれる型であるが、養育という乳児期の感覚の反復に由来するために超越論的テレパシーに時間的にも構造的にも先行し下支えする。それゆえ超越論的テレパシーのうえで生まれる他の身振りの型とは質的に異なるのである。ウィニコット自身はエディプス・コンプレクスを論じないが、超越論的テレパシーにおける型の伝承がエディプス期以降の出来事であるとすると、抱え込みのゆがみは前エディプス期に由来する。

本事例の場合、超越論的テレパシーの水準で秘密の女の子ごっこがゆがみを生み出しているだけでなく、その基板となる養育の体験のなかに性別のゆがみが埋め込まれている。とするとプリミティブな構造においてゆがみがすでに埋め込まれていることになり、コミュニケーションの病理としても根は深くなる。。

ウィニコットの技法～空想身体に埋め込まれた象徴構造の再活性化

ウィニコットの治療の要点は患者におけるこの象徴構造の齟齬をウィニコットの空想身体が生き直すことで再活性化し、かつ言語化したことである。会話のなかで感じた違和感を転移として自覚し、構造的な葛藤として明るみに出している。つまり単に抑圧あるいは解離していた情動を回帰させているのではなく、マヒしていた複数の象徴構造の布置を明らかにし再作動したのである（広い文脈の象徴構造を掘り出すという点ではラカン派の臨床と通じるのかもしれない[Fink 2004, 9-14]）。本論の文脈での転移とは、ウィニコットの空想身体を借りて、母親の空想身体に書き込まれていた身振りの型（これは患者の空想身体がネガのように映し出している）が再活性化することである。このことは主体を貫く象徴構造を明確にすることであると同時に主体が乳児期に直面していた環境のもっていた潜在的分節を追体験することで顕在化することである。

この事例は、コミュニケーションの重要な契機であるゆがみ（うそ、秘密、誤解）とその影響について構造的な理解をもたらしてくれる。うそや秘密は隠された内容以上に、上述のような象徴構造同士の齟齬を植えつけるがゆえに永続的な効果を生むことがある。子供に伝えられない家族の秘密は共存しえない複数の社会的文脈に関わり、それゆえにこの子どもが成人してもこの齟齬が潜在的に触発し続け身振りの型や対人関係の

型のゆがみとして痕跡を残す。

死の欲動の作動とは、空想身体における身振りの型や対人関係のくせのような象徴構造間の齟齬による作動の不全だと定義することが出来る。そして象徴構造は空想身体のなかに対人関係を通して埋め込まれるがゆえに、死の欲動もまた「伝達される」ものであるといえる。コミュニケーションは思考内容を伝えるだけでなく象徴構造を伝承し、さらに象徴構造の齟齬をも伝達する。

情動の主体としての象徴構造

さてこのようにして治療が進んだわけだが、翌日になって患者の中に埋め込まれていた象徴構造「女の子」が抵抗を始める。つまり「風邪を引き」「気分が悪く」なるのである。この情動の問題を考えてみよう。

ウィニコットによるこの解釈が正しいとすると、「気分が悪い」という情動の主体は、意識ではなく患者のなかに埋め込まれた象徴構造「女の子」であることになる。つまり情動とは、プリミティブな衝動性でも意識の一要素でもなく、それ自体は非人称的な象徴構造の作動の痕跡であることになる。寄生虫であることが暴かれた「女の子」が作動し始めて空想身体に残した痕跡がこの情動である。患者の意識は情動の産出には関係していない。ウィニコットのセリフは「女の子」を擬人化して意識を持つ人格のように扱っているが、これは治療の場面の方便であって概念上は正確ではない。「女の子」は、患者の空想身体に埋め込まれた身振りの型であって、意志を持った人格ではない。それゆえ「女の子」が怒ったのではなく、あくまで埋れていた象徴構造「女の子」の活性化によって周りの象徴構造とのあいだに起きた齟齬が、「気分が悪い」という情動の原因と考えられる。性的欲動であっても、それが情動として感じられるのは具体的な対人関係や幻想のなかで発現して他の人とぶつかったときにであり、欲動そのものは意識されない。（定型発達の場合）情動は常に特定の社会的文脈におかれたコミュニケーションで生じる。社会的文脈を持つ限りにおいて、常に空想身体において実現した何らかの象徴構造の作動の痕跡として生じるのである。たとえば虐待経験のある人は特定の状況に身を置くと、大人になっても自分ではコントロール出来ない情動に巻き込まれる。情動の回帰ともいえるが、埋めこまれている身振りの型（コミュニケーションの型）が再起動しているとも言える。現象学で議論されてきた「志向性の随伴物」あるいは「受動的総合の一種」というような情動の扱いは、情動の作動の痕跡の記述であって情動本体の分析ではない。

空想身体を舞台とした現実触発と象徴構造の作動との交差が、意識と身体に痕跡を残す。この痕跡が情動である。ネガティブな情動は、状況の分節と空想身体において作動する身振りの型とのあいだに齟齬が生じたときに起きる。この事例の場合、全体としては治癒すなわち諸象徴構造間の調和に向かっているが、部分的な女の子としての構造が状況の再分節との間できしみが生じているので、一時的に気分が悪くなっているのであ

る。逆に言うと心理療法とは、現実の再分節と適応的な新たな象徴構造の創設とによって両者の調和を見出すことであるともいえる。

このことは情動の理論として一般化できる。正しいことがわかるが情動的には受け入れられない事態というものがある。このとき受け入れがたい嫌悪を生み出す当の主体とは、人格や意識であるというよりも、私のなかに書き込まれた人間関係や社会関係の型・パターンなのであり、これが身を置いている現実のもつ象徴構造とのあいだで齟齬をきたしたときに、その痕跡として受け入れがたい違和感を意識に対して残すのである。そのため根源的な情動性あるいは気分を設定するハイデガーのような議論には違和感がある。特定の象徴構造を身につけた人間が特定の環境と出会うときにのみ気分が生じるからである。人間不在の世界には気分は存在しない。情動は結果として身体や意識で感じられるかもしれないが、情動そのもののを作り出すのは生身の身体や意識ではない。少なくとも言語や社会規範を獲得した人間の場合、空想身体を舞台として作動する象徴構造と象徴構造の齟齬がその場面である。情動を生み出す主体は意識ではなく、意識は情動を事後的に感じさせられるだけである。

象徴構造の三段階の作動と経験

打ち消された象徴構造~~「女の子」~~が、ウィニコットによる解釈で明らかになって初めて「女の子」として作動し始める。ただしこの活性化は潜在的なものであって（本人は単に風邪を引き気分が悪いだけである。そもそも身振りの型という象徴構造の作動は意識によって行われるものではない。意識は作動の結果である気分や情動を「意識する」だけである）、さらにウィニコットが解釈することによって初めて意識化されたような作動である。

患者は、現在は男として生活し働いているのであり男として周囲からも扱われている。ウィニコットは患者が同性愛者でもないし、ゆがんでいたのはかつての環境であるということを強調する。その意味では、無理やり埋め込まれた女の子としての象徴構造は意識されたことがなかったのである。比喩を使うならば回路はあるけれども電気が通っていない電灯である。光ったことがないのでそこに電灯があることに誰も気がつかない。情動は象徴構造間の齟齬であるとさきほど定義した。さらに細かく言うと、かみ合わない象徴構造の作動が気づかれたときに残す痕跡が「気分が悪い」という情動であり、気づかれていない構造は名状しがたい違和感を残すのみなのだろう。これが謎のメッセージの現れかたとなる（精神分析家クリストファー・ボラスは、気分 mood が一般に過去の対人関係の葛藤の再作動であることを示している[Bollas 1987, 99-116]）。

謎のメッセージの一般化

本論での議論は、ラプランシュの一般誘惑理論をもう一度フロイトの外傷理論へと引き戻しただけのように見えるかもしれない。しかしここにはラプランシュの「一般」誘

惑理論以上に一般的な議論への萌芽がある。というのは性的な誘惑に限らず、コミュニケーションはその本質構造のなかに、謎の伝達という現象を含み混んでいるのであり、この謎が象徴構造同士の齟齬を生み出すことで、場合によっては病気を生み出すという現象を説明するからである。本質的に病的なコミュニケーションというものがありうるのである。ラプランシュは性のみが謎となるという議論をするが[Laplanche 1970 ; 71]、コミュニケーションで伝達される内容は性的なものに限られるわけでは全くない。その点で、ラプランシュの一般誘惑理論よりも広い議論を構想することができる。この理論はもはや性的な誘惑に基づくものではない。たとえばベイトソンが統合失調症と結びつけて議論しようとしたダブルバインド理論も、このようなゆがんだコミュニケーションの一様態であり、この象徴構造の齟齬が主体の形成に支障をきたす仕組みをクリアに示すモデルでもある[Bateson 1972, 201-227]。現在では統合失調症とダブルバインド理論のあいだに必然的な関係はないと言われているが、このような状態が何らかの悪影響を持つことは確かであろう。思い込みやうそ・秘密というような極めて日常的でありふれた現象が構造的な効果、コミュニケーションのネガの部分を示している。そしてこのネガは、軽いものから重いものまで様々な疾患と関わりうるのである。

［注］

[i] 空想世界の中心点にある運動性のこと。空想世界のなかでも身体は作動している。この空想のなかの運動感覚は、空想世界の中心で運動するだけでなく、イメージを産出する器官でもある。

[ii] 「両親は、子宮の中にいる子供を欲望することができる。新生児は母と共に生きている子宮内での欲望を持つことができるのだが、ひとたび生まれると、子供についての両親の非欲望が子どもを死の欲動で印付ける可能性がある。この非欲望は子どもの性〔性別、性器〕に関わる（新生児の性は両親にとって重要な意味を持つ）、あるいは何らかの病理、何らかの失望に関わる。」[Dolto, 2003; 114]

【文献】

Bateson, G., (1972), *Steps to an Ecology of Mind,* Chicago/London, University of Chicago Press.

Bollas, Ch., (1987), *The Shadow of the Object – Psychoanalysis of the Unthought Known,* New York, Columbia University Press.

Breuer, J., Freud, S., (1895), *Studien über Hysterie [1895],* Frankfurt a.M., Fischer, 2000 フロイト,『ヒステリー研究』上・下,金関猛訳,ちくま学芸文庫,2004

Dolto, F., (1985), *Séminaire de psychanalyse d'enfants 2,* Paris, Seuil

Dolto, F., (1987), *Dialogues québuécois,* Paris, Seuil

Dolto, F., (2003), *La vague et l'océan – Séminaire sur les pulsions de mort (1970-1971),* Paris, Gallimard

Fink, B., (2004), *Lacan to the Letter – Reading Écrits Closely,* Minneapolis/London, University of Minnesota Press, 2004

Laplanche, J., (1970), *Vie et mort en psychanalyse,* Paris, PUF, 1970 [2001/2008]

Laplanche, J., (1987), *Nouveaux fondements pour la psychanalyse,* Paris, PUF, 1987 [2008]

Laplanche, J., (2006), *Problématique VI, L'après coup,* Paris, PUF

Laplanche, J., (2007), *Sexual – La sexualité élargie au sens freudien 2000-2006,* Paris, PUF

村上靖彦(2009a),「嘘とは何か～現象学的分析」,『臨床精神医学』38-11, 2009/11

村上靖彦(2009b), 「超越論的テレパシーを貫く治療者の欲望～フッサールとドルト」,『現代思想』,１２月臨時増刊

村上靖彦(2010a),「創造性と知覚的空想～フッサールとウィニコットを巡って」,『人間科学研究科紀要』36 巻,大阪大学大学院人間科学研究科, http://www.hus.osaka-u.ac.jp/kiyo.html

村上靖彦(2010b),「メタファーという治療装置～フォーカシング・フッサール・よしもとばなな」,『現代思想』,５月号,青土社

WINNICOTT, D.W., *Playing and Reality,* London, Routledge

The Secret and its Future

－Winnicott/Laplanche/Dolto and Distortion of Communication－

Yasuhiko MURAKAMI

The concept of enigmatic message proposed by Jean Laplanche can explain the mechanism of distortion in communication and its consequences. The seduction of an infant by his (her) parents is incomprehensible for him (her) and it becomes an enigmatic message without meaning. Later in life, an event can reactivate this old seduction, and thus this new event becomes traumatic. Therefore, this traumatism is formed through two phases of events. An old potentially traumatic but veiled event is the source of the actual traumatism.

Françoise Dolto reinterprets the Freudian concept of death instinct. According to her, the death instinct is the paralysis of an imaginary body– more precisely that of the function of symbolical structure installed in the imaginary body. Furthermore, this paralysis is caused by the distorted communication with patient's environment (e.g., mother's care). These two psychoanalysts provide us with structural comprehension on the effect of miscommunication.

A case of perversion reported by Winnicott demonstrates this effect and obliges us to conduct further investigation. The symbolical structure is transmitted in the perceptual phantasia *(perceptive Phantasie)*. Moreover if a structure that contradicts other structures is installed in one's imaginary body *(Phantasieleib)*, this contradiction has some effects in the future. Ordinarily, we cannot be aware of this contradiction, and therefore, this distortion in our imaginary body requires psychotherapy. The therapeutic process of Winnicott consists in the incarnation as the patient's dead mother who had obliged him a distorted gender identity. In the therapeutic setting of the perceptual phantasia (that he calls the transitional area), Winnicott discovers the function of the imaginary body of the patient's mother via that of the patient. He reactivates the function of the symbolical structures and thus seeks to find a harmony between two contradictory gender structures.